

偏愛彩色ヴァーチャルドール特典『マイ・フェアードール』

最初に起¹じつた『変化』は、たぶん声変わり。

可愛くてお気に入りだったボクの声が、大人の男の声へと『変化』し、ボクは大いに絶望した。

のど飴を舐めたり、動画を見ながらボイストレーニングをしたりと自分なりの努力を繰り返したが、ボクの声が戻る」とはなかつた。

それどころか、追い打ちをかけるように、次は肉体の『変化』があつた。それまで可愛い可愛いと繰り返していた周囲のボクへの扱いが、どんどん『男』を見る目へと『変化』していった。

ごく一般的な男子としての成長期は、ことごとくボクの心を傷付けていく。小学校の時から一緒に遊んでくれていた女子グループがボクを仲間に入れてくれなくなり、更にはグループの数人が告白をしてきた。性別を超えた友達としてではなく、恋愛対象となる『一人の男』として扱われるようになつたことが、この上なく辛かつた。

べつに、女になりたいわけじゃない。
だけど、男でありたいわけでもない。

性別なんて超えて、自分の好きなスタイルを貫きたいだけだ。

とくにボクは小さい頃から可愛いモノが好きだったから、そういうファッショニスタイлемを選びがちだったというだけなんだ。

だから、ボクは自分で、自分の居場所を作り上げた。
服飾関係の学校や、好きなアパレルブランドの店へ通い続け、SNSでも頻繁に自分で作った洋服や着飾った自撮りを掲載し、気付けば『男の娘』界隈で有名な『ユズ様』として扱われるようになつていた。
最高に可愛い姿で時を止めたボクの自撮りで、何万人ものファンが喜んでくれる。

こんなにも嬉しい幸せなことは無いと思つた。
だけどその裏では、心を弓も裂くような『変化』もたくさんあつた。

SNSで発信し始めた頃、学生時代から付き合ひのあった友人たちが、聞くに堪えない差別的な冗談を向けて来たり。

ボクの全てを受け止めたいと黙ってくれた恋人が、
結局はボクの肩書きにしか興味が無く、
裏ではボクの知名度を利用して色んな人に迷惑をかけていたり。

ボクがボクのまま在り続けようとする度に、周囲は大きく『変化』していった。
一方でボクは、洋服とメイクによつて『完璧な不变』を手に入れた。

みんなは、洋服やメイクで違う自分へと『変わる』のだと黙つが、
ボクはむしろ、次々と『変化』していく自分自身を、洋服やメイクによつて
『変わらないありのままの自分』へと繋ぎとめてこねよつた感覚だつた。

だからボクはオシャレが好きだ。

男でも女でもない。
だけど、男らしくも女らしくもあんな『ボク』を、
オシャレは決して裏切らない。

ボクはボクのまま、変わらずにいたい。

性別や老い、体格といった『変化』を恐れない、
最高に可愛い『不变』で在り続けたい。



ボクが【彼女】の「」とを意識し始めたのはいつからだつただろうか。お店専用のタグで検索していた時、ふと目に付いた一つの投稿。前半部分は、ボクのお店や服を褒めてくれていた。

控えめそうな性格が伝わってくる、非常に慎重で、丁寧に言葉を選んでくれたんだとわかる文章。

だけど後半部分の文章にボクは目を奪われた。

そこには、『洋服やメイクは自分が変えられてしまい、戻れなくなつてしまつような恐さ』があると書かれていた。

とても不思議な感覚だった。

彼女の『いつてる』とがまるで理解できなつような気持ちでもあり、しかし何故か言いたいことがわかるよつな、そんな不思議な感覚。

彼女は文章の最後に

『だからコズ様みたいに、しっかり自分を持つている人ー』と、オシャレによる『変化』に飲み込まれないのかな』と添えていた。

その投稿を読み終えていた時点で、

たぶんボクは彼女に心を奪われていたんだと思う。

ボクにとつて、オシャレは『自分を変えないためのもの』だった。

だけど彼女にとつてのオシャレは、『自分をえるためのもの』なのだといつ。

気付いた時には、彼女のアカウントから、これまでの投稿を眺めていた。
何氣ないおはようの挨拶や、日々の何氣ない瞬き、食べ物の写真。
そんな中で田に付いた二つの「」。

一つは、彼女の友人と思われる子が、
ボクを熱狂的に支持してくれるファンだということ。
確かにイベントでも何度か見かけたことがあるし、
おそらくその子の繋がりで彼女はボクのことを知ったのだと思う。

そしてもう一つは、彼女があまり自分に自信を持つてこなことこのじる。
だからオシャレを恐がつてこないし、
自分を『変えられてしまつ』と捉えてこない。

けれど、オシャレに興味を持つてこないわけでもない。
興味があるからこそ、ボクや、ボクの作る洋服に憧れのような感覚を抱いている。

彼女のことを知れば知るほど、驚くぐうい感情が昂つた。
初めてフリルたっぷりの服を着たあの時のように。
初めてメイクを覚えて鏡を眺めたあの時のように。
初めて『男の娘』でデビューしたあの時のようだ。
様々な方向の創作意欲が溢れて止まらない。
彼女に似合つ服を作りたいと思つた。

自信が無いという彼女に、
キミがどれだけ魅力的なのかわからせいやれるような、
圧倒的なオシャレを教え込みたい。

上から下までボクがコーディネートした彼女と、
都心のファッショングッズを一緒に巡りたい。

たまに双子コーデなんかしちゃつて、仲が良すぎる姉妹つて「ハセペア」とい、
写真をたくさん撮るのもありかもしねない。
きっと彼女は、事あるごとに自信が無いって言つと思つ。
だけどその度にボクが極上のオシャレを提供して、
誰よりも可愛いって書いて、そしてたくさんの愛してあげるんだ。
少しずつ彼女が自信を持つようになつていいく様子を、
ボクだけが独り占めできたら最高だと思つ。

そこまで考えて、ボクは我に返つた。
たつた一つの投稿。それだけで、一瞬で彼女に思いを馳せてしまつなんじ、
ぶつかやけ正氣の沙汰ではない。

だけじ……だけじ彼女の「」とがやうせつ【】になつて仕方がなかつた。

何よりもボクの頭の中はもつ、彼女をたゞかん着飾つて、
彼女とたゞかん愛し合つた妄想でこゝまでになつてこゝ。

彼女のためなら何着でも服が作れる『』がする、

彼女のためなら何時間でも愛を捧げられると思つた。

つまづけついで、恋してゐるのだとだらうか?

わからない。

わからない、けれど……彼女がボク以外の誰かのモノにならぬのは嫌だった。

オシャレによつて『変えられてしまつ』を躊躇がねえキ!!。

ボクとは真逆の解釈を持ちながうも、
ボクと同じくにオシャレに興味を持つてこのキ!!。

ねえ、『』。

自分を『変えられてしまつ』かもしけなつて恋がねえじるませ、
なんだかんだ、キ!!せつつかつ【自分】ついてもを持つてこねいじとなんだよ。

いややんと【自分】を持つてこなから、

『変えられたくない』つて、もう思つてこじやないかな?.

それつてね、ずっとボクが求めてやまないモノなんだ。

男としても女としても生きたい、欲張りで、

それでいていつだつて迷子のよつな寂しさを抱えるボクはね、
オシャレのお陰でよつやく【自分】を見付けられたよつな気がした。

だけじキ!!は、オシャレが無こままでも【自分】がある。

【自分】を持つてこなから、オシャレで『変えられてしまつ』を戀がねえじる。

キ!!はボクへ憧れを向けてくれたけど、
ボクへのキ!!に憧れてこなのかもしけな。

キミのホンヤレへの解釈を曰こしただけで、

こんなにもキミの「」と頭がこいつにになつてしまつてしまつ……

ボクはキミに強い感情を抱いてしまつた。

だからキミが他の誰かのモノになるのは嫌なんだ。

自信の無さでまだ隠されてるキミの魅力を、ボクだけが独り占めしたい。

数十万人のファンがいて、自分の店もブリッジを持つて、

『ユズ様』と慕われててる」のボクが……

ずっとずっと求められてるキミ、いつもやべれどまだだ。

今度行われる店のイベントに、キミとの友達を招待しそう。

そこでボクはキミと交流を開始して、

キミがボクに心を開くから仲良くなつて、
ボクからキミに生田つて、セヒト、セヒト……

そしてボクはキミと、永遠に変わらない関係を求めるんだ。
ボクを何者にも『変わらな』『ボクへと繋がる』とめてくれる、あの試着室の中で……

キミを「これ以上無くなる」と可愛く飾り立て、そして愛し尽くすんだ。

ああ、想像するだけで心が躍る。

少女のよつこ心がどきどきして、少年のよつに胸がワクワクする。

絶対に、逃がせないから。

キミを『変へる』のも、キミとの関係を『変わらなくする』『やめる』のも、

ボク以外にえりえないから。

お人形さんみたいにボクのお部屋で飾っちゃうかもしないから。

……でも、それもなんだかいかもしない。

なんてね、えへへつ。

だから、ね?

どうかボクからの告白をOKしてね?

それでいつか試着室の中で、ボクと永遠の関係を築いてね?

じゃないとキミの自由を全て奪つて、

お人形さんみたいにボクのお部屋で飾っちゃうかもしないから。